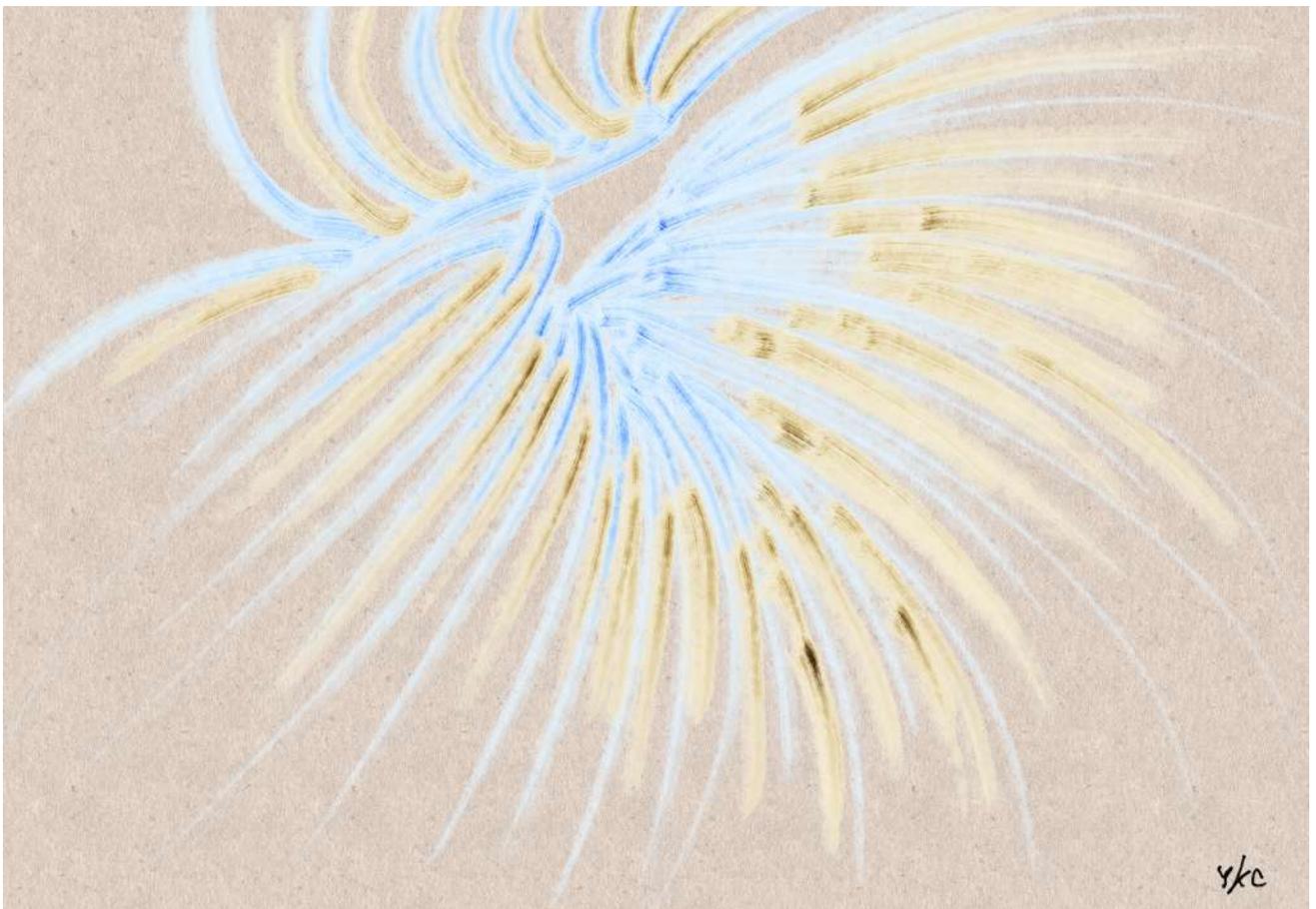

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 293

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



No.433 穏やかな心で_In a Peaceful Mind

目次

- 5841. 今朝方の夢
- 5842. 霊性の物質化の進行
- 5843. コロナ渦における思慮深い行動について
- 5844. 今朝方の夢
- 5845. 本日の振り返り
- 5846. 今朝方の夢
- 5847. 繋がる縁と静かな心
- 5848. 自己の現象性・移ろい性: 欧米での9年目の生活に向けて
- 5849. 「客死」「宿命」「運命」について
- 5850. おぞましさを伴う夢
- 5851. 本日を振り返って
- 5852. 今朝方の夢
- 5853. 今朝方の驚き: 椎茸の原木栽培を始めた父
- 5854. 今朝方の夢
- 5855. 発達現象に関する科学的な議論と規範的な議論の峻別と統合及び標準化アセスメントの危険性
- 5856. 「能力のフラットランド化」が進行する現代社会で求められる能力とは
- 5857. 今朝方の夢
- 5858. 脳・心・魂の次元におけるジャンクフード: 絶えず政治的なアセスメント
- 5859. 今朝方の夢
- 5860. 音と絵を通じて詩を綴る人生

5841. 今朝方の夢

近くで小鳥が鳴いている。心地良いリズムと心地良いメロディーを持った鳴き声。それは自分の心を深く安らかにしてくれる。安らぎの中で安らぎとして前に進んでいくこと。今日もそうした1日になるはずだ。

フローニンゲンもようやく暖かくなり始めており、今日の最高気温は20度近くになる。来週には25度近くに達する日もあるようだ。フローニンゲンは夏でもそれくらいの気温が最高気温であり、夏の数日間だけかなり暑い日もあるが、基本的にはここからはもうあまり気温が上がらないように思える。

今年もまた夏がやって来るのか。私がフローニンゲンにやって来たのも夏の時期であったから、新たな夏を迎えるたびに、いつも感慨深いものを感じる。時の循環過程と関係なく、自分の内側には常に情熱の塊のようなものがあるが、この夏はそれをより一層目覚めさせてくれるに違いない。創りに創ること。この夏はそうした夏になる。

昨日はあまり印象的な夢を見ていなかったが、今朝方はいくつか記憶に残る夢を見ていた。夢の中で私は、オランダの雰囲気を感じさせる街にいた。しかしそこは今住んでいるフローニンゲンではなく、港のある街だった。オランダは平地の国であり、高い山はないのだが、その街には山と海があった。私はその街の旅館に宿泊していた。ホテルではなく、日本風の民宿のようなものがあって、そこに滞在していたのである。

その日は観光に出かけようと思っていたので、民宿の外に出てみると、そこに1台の観光バスが止まっていた。すると中から、いつもお世話になっているフローニンゲンの街の中心部のオーガニックスーパーに務める店員のメイに似た女性が出て来た。彼女の横には彼女の兄らしき人物と妹らしき人物がいた。私は2人に微笑みかけ、手で挨拶をした。2人はそれに対して同じように笑顔で挨拶を返してどこかに行った。

バスから降りて来たメイが、私に何かを手渡して来た。見ると、メッセージカードと電話番号だった。メイ曰く、彼女の妹が私の誕生日を知っていて、彼女は日本人に関心があるとのことであり、今度私と話をしたいとのことだった。今すれ違った感じだと、メイの妹はまだ高校生ぐらいの年齢のように思えたが、話をしてみたいとのことだったので、後日彼女に連絡を試みようと思った。すると次の話

題として、メイがこれから旅館の近辺のガイドツアーをしてくれると述べ、私もそれに参加しないかと声を掛けてくれた。私はその申し出を有り難く思い、ツアーに参加することにした。

旅館の前にはツアー参加者がすでに集まっており、大半はオランダ人だった。その中に、2人ほど日本人がいて、見ると、小中学校時代の友人(YU & SI)だった。私は2人に声を掛け、その場で立ち話をしていると、いつの間にやらツアーが始まっていて、私たちはその場に取り残される格好になった。もうツアー参加者たちの姿はどこにも見えず、私たちは仕方ないので、旅館に戻ることにした。

すると、ちょうど雨が降り始め、道が見る見るうちに浸水し始めた。私たちはなんとか一難を逃れ、旅館の中に入ることができた。旅館の入り口近くには、併設されている体育館につながる道があり、体育館を覗いてみたところ、中で誰かが剣道をしていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はどういうわけか、母からコーチングを受けることになっていた。セッションの時間は朝の9時からということで、早めにセッションの行われる場所に行って待機していた。しかし、時間になっても母は現れず、どうしたものかと思っていたところ、セッションの時間が随分と過ぎてから母が現れた。どうやら寝坊をしてしまったようだった。

セッション開始の時間を過ぎていたが、母は特に謝ることをせず、まだ眠たそうな顔をしていた。すると、いつの間にかその場にいるのが母ではなく、コーチングに携わっている私の知人になっていった。母からコーチングを受けるのか、それとも知人からコーチングを受けるのか、どちらなのか頭が一瞬混乱したが、彼女もまた眠たそうな顔をしていて、セッションの時間に遅れてやって来た。母も知人も、セッション開始時刻から随分遅れて姿を現し、謝りもせずに引き続き眠たそうな顔をしていった。それを見て信頼が置けないと思い、2人からコーチングセッションを受けることはもうやめようと思った。そこで目が覚めた。フローニンゲン:2020/5/20(水)07:20

5842. 霊性の物質化の進行

時刻は午後7時半を迎えようとしている。今日は午後を迎えてから、青空が広がり始めた。そして今も太陽の光が燦々と輝き、新緑が輝いている。

数日前に日記を随分と多く綴っていたことが影響してか、ここ数日は日記の執筆が落ち着いている。おそらく先日に集中的に日記を執筆したこと以外にも、あの日以降連日、「一瞬一生の会」の補助教材として音声ファイルを作成していたことも要因として考えられるだろう。今日もいくつかの音声ファイルを作成していた。

本日の午後に、カート・フィッシャー教授の追悼論文集と20世紀の和声学に関する書籍が届いた。前者については、いくつか非常に重要な論文があり、それらを取り上げながら音声ファイルを作成していこうと思う。後日改めて書き留めておきたい論点としては、アメリカコロラド州のナローパ大学の創設者であるチョギヤム・トゥルンパが提唱した「霊性の物質化 (spiritual materialism)」の問題と、ダーウィンの進化論を前提とした文化と制度の問題が挙げられる。それらの論点は、今回のコロナの件を皮切りにしてますます重要になるように思われる。

霊性への関心の高まりは歓迎するものであったとしても、それが物質化され、道具主義的な観点で捉えられてしまうことを危惧することに加え、隣人愛と慈愛の精神が喪失し、ある特定の精神風土や制度に適応できない者を容赦なく切り捨てようとする社会のあり方にも危惧を覚える。前者の論点については、チョギヤム・トゥルンパの主著“The Sacred Path of the Warrior, Cutting Through Spiritual Materialism, and The Myth of Freedom”を読みながら理解を深めていこう。

私たちの自我の恐るべき特性。それは自我の保存と肥大化のためであれば、全てを道具のように利用しようとすることである。そうした自我の特性が、霊性の物質化の大きな根元にある。

今回のコロナの一件を経て、内面領域への関心が高まったとしても、それを直ちに喜べないのはその点にある。自我のそうした道具主義的な性向。それに絡めとられてしまっただけでは、真に霊性を開発していくことなどできないだろう。

自我の皮肉な特性。自我は本来、空(くう)なのだが、自我は空であるはずの自身をより良きものに飽くなき形で改善しようとする。言い換えれば、本来存在かつ非存在であるはずの自我は、自身をまるで物質のようにリアルにそこに存在するかのように自身を認識し、自身の存在の保存に向けてありとあらゆる手段を講じようとする。その結果なされるのが自我の肥大化である。自我がより健全な

形で発達を遂げていくことには好ましい側面があるにしても、この現代社会においては、そうした方向性よりも、自我を肥大化させ続ける方向性の方が遥かに大きな位置を占めている。

霊性の開発とは本来、自我の肥大化を意味するものではなく、むしろの逆のものであるはずだ。まさにピアジェが述べている通り、健全な自我の発達とは、自己中心性の縮小過程なのであり、飽くなき形で自我を肥大化させ続けていくことでは決してない。自我を発達させていくというのは、空なる自我を永遠に磨き続けることではなく、むしろそうした衝動を手放し、自我の発達ゲームから降りることを意味するのではないだろうか。フローニンゲン:2020/5/20(水)19:41

5843. コロナ渦における思慮深い行動について

時刻は午前6時を迎えた。白いカモメが早朝の青空を優雅に羽ばたいている。辺りはすっかり明るくなっており、赤レンガの家々に朝日が照り始めるのも間もなくだ。小鳥たちのさえずりが家の目の前の庭から聞こえて来て、それが心を清く安らかなものにしてくれる。

昨日は午後9時半前から就寝準備を始め、いざ就寝しようと思った時には、まだ辺りが明るかった。本当に随分と日が伸びたものだ。

ここ2日間は、諸々の取り組みの都合上、就寝前までパソコンの画面を眺める必要があり、その結果として、睡眠の質が少し下がっていたことに気付いていた。それが悪習になってしまうことを防ぐために、昨日は9時を迎える段階で、パソコンの画面を眺めることをやめ、早めに就寝したところ、やはり睡眠の質がとても高くなった。今日からも以前のように、午後9時を迎えたら、パソコンを用いた作業をやめ、絵を描きながら寛ぎ、その後9時半を迎える頃になったら、早々と就寝準備を始めようと思う。

今日はとても嬉しいイベントがある。イベントと言うと大袈裟かもしれないが、本日ようやく髪を切れる。かかりつけの美容師のメルヴィンに前回いつ髪を切ってもらったのか覚えていないぐらいだ。フローニンゲンの街も活気を取り戻し始め、確かにまだ入場制限がかかった店があったり、スーパーには特設手洗場が設けられていたりするが、人々の表情は明るく、コロナも随分と落ち着いたように思える。だが、日本の協働者の方々に話を聞いてみると、日本ではまだまだ陰鬱な雰囲気が漂っているようで、状況は少し違うようだ。

今回のコロナの件で、一体どれだけの人が物理次元のアクションだけではなく、精神次元のアクションを行ったのだろうか。確かに、ウィルスの拡散と感染防止のために、ソーシャルディスタンスを取ることは重要だと思うのだが、そうした物理的な次元における距離を取るだけではなく、一体何人の人が精神的次元における距離を諸々の現象に対して取ったのだろうか。それこそ、コロナかにおいて様々に流れる情報、とりわけそうした情報を流すマスメディアやソーシャルメディアとどれだけ適切な距離が取れたであろうか。

今回の件に関しては、「正しい情報を取り入れよ」と言っても、何が正しい情報なのか判断が難しいような状況であったから、確かに様々な方法を通じて情報を取り入れようとするのはあながち間違っていないアクションかもしれないが、一体どれほどの人が、個別具体的な情報を適切な距離、つまり俯瞰的ないしは客観的な視点を持ってそれを眺め、さらにはそうした情報を生み出す関係者の利害を含めた背景情報にまで思考を巡らせることができたであろうか。そうしたことが仮にできていなかったのであれば、それはコロナに感染していなかったとしても、れっきとした精神的な犠牲者なのではないかと思う。また、情報に対する適切な距離だけではなく、こうした最中にある自己そのもの、とりわけ自己の内面をどれだけ冷静に眺めることができたであろうか。

自己の内面と認識上の適切な距離を取り、自分の心がどのような姿でいかように動いているのかを適切に観察し続けていた人がどれだけいるだろうか。また、社会そのものと適切な距離を取って、今回の一件を取り巻く社会の精神的なダイナミズムや、施策や制度の動向をどれだけ冷静に眺めることができたであろうか。何が最適かが分かりにくい状況の中で、その場で最も最適な行動を取っていくことは確かに難しいが、少なくとも思慮深い行動というのは、上述のような諸々の現象・対象に対して適切な距離が確保されていなければ生み出されないもののように思える。フローニンゲン：

2020/5/21(木)06:31

5844. 今朝方の夢

一昨日に無事にiPad Pro用の革のカバーが届き、iPad Proを使って絵を描く気分がまた新たなものになった。仮にそうした物理的な変化がなかったとしても、絶えず日々新たな気持ちを持って生きていこう。それでは、今朝方の夢について振り返り、その後絵を少々描いてから、早朝の作曲実践に取り掛かる。今日は午後の散髪しか用事がないが、どこかで時間を取って、「一瞬一生の会」の

ための音声ファイルの作成をするか、依頼を受けている分析作業をしてもいいかもしれない。そのようなことを考えている。

夢の中で私は、前職時代のオフィスにいた。そこには以前お世話になっていた懐かしい顔がたくさんあって、お世話になっていた上司の大半はまだそこにいた。私は、働いていた時と同じデスクにつき、今から仕事に取り掛かろうとした。すると、デスクを仕切るパーティションが撤廃されていることに気付いた。隣に座っている人の顔がより見えやすくなっており、フロア全体も眺めることができるようになっていた。

いざ仕事を始めようと思ったら、「加藤君の席はあっちになったよ」と1人の上司が話しかけて来た。どうやら私の席は移動されたらしく、上司が指差す方向に向かった。ちょうどそこには、同じ大学を卒業した先輩の上司がいて、その方の横が自分の席かと思ったが、さらにもう1つ右隣だった。私の左横には、私よりも後から途中入社して来た上司が座っていた。その方はとても優しく気さくな方でもあったので、どのような仕事を行っているのか尋ねてみた。何やら、ある製造メーカーの海外子会社の貸借対照表を精査し、税務的な観点からより適切に作り直しているとのことだった。それは面白そうな仕事に思えたので、何か手伝えることがあれば声をかけてくださいと述べ、私は自分の仕事を始めることにした。

すると、自分の机の上に、見慣れない資料が散在していた。どうやらそれは、自分がやってくる前にその机を使っていた人のものらしかった。すると、「ごめん、ごめん」という声が聞こえ、声のする方をみると、小中高時代の友人(MS)だった。どうやら彼がその席を使っていたようであり、彼は資料を片付けると、どこかに行ってしまった。

いざ仕事に取り掛かろうとしたところ、その前にトイレに行っておこうと思い、私はトイレに向かった。トイレに入ろうとしたところ、洗面台に女性たちの姿が見え、自分が女子トイレに入ってしまったことに気付いた。どうやら私が働いていた時とは違い、男女のトイレの場所が入れ替わっていたようだ。私は慌てて女子トイレから外に出て、男子トイレに入った。用を足す便器の前に立った時、突然便器からシャワーのような水が出て来た。私は慌ててそれをよけた。いったいこれはなんなんだと思ったが、便器の状況を冷静に眺め、その後、水がシャワーのように溢れ出てこない便器を見つけ、その前に立ったところで夢の場面が変わった。今朝方にはその他にも、空を飛んでいる夢を見

ていた。ある島から別の島に移動するために、海の上空を飛んでいた。眼下の海を眺めると、巨大な魚が泳いでいる姿が確認され、ちょっと釣りでも楽しみたい気分になった。

夢の途中で、高度が徐々に落ちて来てしまう場面があり、その際にはいったん休憩をして、再び空を飛ぶと、また高い高度で飛ぶことができた。この夢は、休息を取ることの大切さを示唆しているように思え、適度な休息によって高い場所を飛び続けることが可能になることを教えてくれているようにも思える。フローニンゲン:2020/5/21(木)06:53

5845. 本日の振り返り

時刻は午後7時を過ぎた。つい今し方夕食を摂り終え、1日を振り返る日記を書いている。

今日は晴天に恵まれただけでなく、気温も高かった。この時期のフローニンゲンにしては珍しく、最高気温が25度近くまで到達した。午後に街の中心部に出かけた時は半袖で十分であり、しばらく歩いていると少々汗ばむほどであった。

本日ようやく髪を切ってもらうことができ、かかりつけの美容師かつ友人のメルヴィンが元気そうで何よりであった。店を1ヶ月半以上開けられなかった都合上、ビジネスへの影響はあったそうだが、その分自由な時間が多くあり、有意義に過ごしていたそうだ。メルヴィンからのテキストメッセージにあったように、自宅にジムを作り、そこで鍛えていたおかげで随分と体が引き締まっていたことには驚かされた。

私よりもメルヴィンの方がオランダ政府の対応について詳しいであろうからいろいろ話を伺ってみたところ、来週からバーやレストランなどの飲食店が本格的にオープンするそうだ。ただし、店内で飲食することはできず、テラス席など、外でのみ飲食が可能とのことであった。

メルヴィンとも話し合っていたことだが、今回は物理的な次元でのウィルスのみならず、精神的なウィルスも蔓延し、それに感染してしまった人の方が多いのではないかと思う。精神的なウィルスの種類や性質には様々なものがあり、ここでそれらを取り上げることはしないが、いずれにせよ、物理的・物質的なウィルスの被害だけが拡大していたわけではないことは簡単に想像できるだろう。

夕方に戻ってからも色々と考え事をしており、やはり今回の世界的な危機的状況は、ウィルスの蔓延という形で単に大きく顕在化されただけであって、実は私たち現代人は最初から、絶えず様々な危機の下にいたのではないかという考えが芽生えた。今回の一件は、絶えず危機を意識し、危機に備えよ、あるいは危機に対処せよというメッセージだったのかもしれない。そのようなことを思う。

今日1日を振り返ってみると、本日もまた落ち着いた心で創作活動に励む1日だった。時の流れと寄り添い、それに合一する形で創作活動に打ち込んでいた自分がいた。明日はオンラインミーティングが一件あり、それに加えて「一瞬一生の会」のための音声教材の作成を行おうかと思う。ここ最近ではまたいくつかこれまでになかった論点や概念について考えを深めている最中であり、それらについて現時点での理解や発見事項を音声教材にしていくつもりである。フローニンゲン:2020/5/21(木)
19:32

5846. 今朝方の夢

時刻は午前3時を迎えた。今朝の起床は午前2時半と、いつもより早かったが、目覚めた瞬間に、良質な睡眠を十分に取った感覚があり、目覚めはすっきりしていた。

先ほどヨガの実践をしている時に、自分の身体の皮膚を触ってみたところ、以前よりもさらに肌の調子が良くなっていることに気づいた。ここ最近意図的に変えてみたことは、バイオダイナミクス農法で作られたチーズを食べることだったので、チーズのカルシウムやタンパク質など、チーズに含まれる諸々の栄養素がしなやかな肌を作ることに貢献してくれているようだ。最初はチーズを摂取することによって、腸内環境が良くない方向に変化してしまうことを危惧していたが、それは杞憂に終わったようだ。むしろ腸内環境の多様性がもたらされ、好転したことを嬉しく思う。

午前3時を迎えた今は、辺りはまだ真っ暗であり、小鳥たちも鳴き声を上げていない。ここしばらくは小鳥たちの方が早く起床していたのだが、今日は私の方が早かったようである。気温に関しても昨日が暖かかったために、今の気温は16度と非常に高い。今日も日中は23度まで気温が上がるようだ。今日は午前と午後にそれぞれ1件ほどオンラインミーティングがあり、それ以外の時間は創作活動に励んでいこうと思う。

今朝方は少々印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、見知らぬサッカーグラウンドにいた。グラウンドの上には数名ほどの友人がいて、彼らとサッカーの練習をしていた。人数としては本当に少なく、キーパーを務めていた友人と、パスを送ってくれる友人が2人、そして相手役になってくれる友人が2人であった。その場にいた全員と会話を楽しみながら練習をしていて、私は、そういえば自分は公式戦でほとんど得点を決めたことがないことをみんなに打ち明けた。

すると、その場にいた友人たちは相当驚いた表情を見せた。というのも、私は紅白戦の時には積極的にシュートを放ち、頻繁にゴールを決めていたからである。練習中にはトラップのコントロールが乱れることはなく、パスを受けてからシュートまでの動作が速やかなのだが、試合になると、なぜか全ての動作が乱れたり、もたつく傾向にあった。より実践を意識した練習を始めてみたところ、最後の最後に同様の現象が発生し、相手役を務めてくれていた友人の2人を交わしてシュートまで持っていくことができずに終わった。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2020/5/22
(金)03:26

5847. 繋がる縁と静かな心

時刻は午後7時を迎えた。振り返ってみると、今日は午前中に雷が伴う激しい雨が降っていた。雷と雨は午後には止んだが、そこから夕方にかけても空には雲がかかっていた。ところが、今の時間帯になってみると、あの激しい雷と雨が嘘のように空が晴れ渡っている。書斎の窓から流れ込んでくる風の香りを嗅いでみると、雨後のほのかな香りがする。

夕日に照らされた新緑の木々の葉が、風に揺られている。それはそよ風とは言えないが、それでも優しさがそこに垣間見える。

今日は午前と午後にそれぞれ1件ずつオンラインミーティングがあった。午前のミーティングでは大変素晴らしいご縁があり、ここからまた何かが動き出していくような予感がする。

振り返ってみると、今朝は午前2時半に起床していた。昨夜の就寝に向けた準備が良かったのか、良質な睡眠を取ることができ、短眠でも全く問題なく今に至る。もちろん午後いつものように仮眠を取ったが、仮眠の時間もいつもと同じほどの量だった。今この瞬間、どこか不思議な静けさが自分の心を取り巻いている。それは心を優しく包摂している。そんな時は、無駄に言葉を紡ぎ出すこと

をせず、黙ってその感覚の中に浸った方がいいのかもしれない。今夜はそうしよう。そのような気分なのだ。

明日もまた、目には見えないところで繋がっていく縁の力の恩恵に授かりながら、自分の取り組みを一人前に進めていこう。小さく進むこと。穏やかな心で、感謝の念を持って、一人小さく前に進んでいくこと。明日もまたそれを実現させる貴重な1日になる。フローニンゲン:2020/5/22(金) 19:19

5848. 自己の現象性・移ろい性:欧米での9年目の生活に向けて

時刻は午前6時半を迎えた。今日からは週末の休日を迎える。私が住んでいるフローニンゲンは、平日も休日もほとんど変わらないような落ち着いた時間が流れている。コロナ下において、その落ち着きは増し、とても静かな雰囲気が街全体を包んでいた。ここ最近ではコロナも落ち着き、街には活気が戻ってきている。活気が戻りながらも、それでいて平穏さがあるこの街。そんな街を私は愛している。

昨日の午前中には雷が伴う雨が降っていたが、今朝はそれが嘘のように静かな世界が広がっている。そよ風が時折吹き、小鳥たちはいつものように美しい鳴き声を上げている。

今、赤レンガの家々の向こうにある公園に生えている大きな木のとっぺんに、2羽の鳥が止まった。そして今、彼らはどこかに飛び去っていった。

現象性、ないしは移ろい性としての自己については先日日記に書き留めていたように思う。木に止まった鳥とそこから羽ばたいた鳥は同一の鳥なのだが、それは果たして本当に同一の鳥なのだろうか。意味空間上、「鳥」に付帯される形容詞的修飾語がそもそも異なり、私は「木に止まった鳥」と、「木から羽ばたいた鳥」の間に横たわる差異を見出していたようなのだ。あるいは、もはやそれらを別の鳥だと認識していたと言えるかもしれない。外見上それは同一の鳥であっても、そこに付与する、あるいは付与される意味が異なる時、それはもはや別の存在者として認識されるのではないだろうか。そうであれば、この日記を今書いている自己はどうだろう。この自己もまた、絶えず付与される意味が異なり、現象性・移ろい性を絶えず内包している。いや、自己がそうした特性を内包しているというよりもむしろ、自己は現象であり、自己は移ろいそのものに他ならないのではないだろうか。

フローニンゲンも少しずつ初夏を感じさせる。大抵の日には、自宅の中ではもう半袖で過ごせるようになった。例年よりも少し早く、もう湯たんぽを使って寝ることや、マフラーを付けて外出することがなくなった。ここ最近は例年よりも暖かく、夏の本格的な到来も今年は早いのかもかもしれない。

今年で9年目となる欧米生活。時間というのはやはり相対的なものであり、昨日も、9年というものが長いのか短いのかはよくわからないと思っていた。この9年間で体験してきたことや積み重ねてきたことを考えれば、それは長いと言えるかもしれない。一方で、これから後少なくとも85年間は欧州のいくつかの国に生活拠点を設けて生活をしていこうと考えていることを鑑みると、9年間というのとはとても短いように思える。

欧州の土地の恩恵を受けながら生活を続けていくことがどれだけの期間になろうとも、自分にできることは一つしかない。人知れない場所で、人知れない形で自分のライフワークに取り組み続けること。それをこれからも継続させていく。

今日もまた創作活動に打ち込んでいこう。ただし今日は午後に時間を取って、「一瞬一生の会」の皆さんが執筆してくださっているリフレクションジャーナルを拝読し、それに対するコメントを補助音声教材として録音していこうと思う。第2期の会が始まってからまだ1週間しか経っていないのだが、参加者の皆さんがとても積極的にリフレクションジャーナルを執筆しており、大変感銘を受けている。全員のリフレクションジャーナルは一つの共有ドキュメントに随時アップロードされており、今日はそれを見ながら音声教材を作っていこうと思う。2日分のジャーナルに対して1つの音声ファイルを作っていくというように、補助音声を分けて作成していくのがいいかと今のところ考えている。フローニンゲン:2020/5/23(土)06:51

5849. 「客死」「宿命」「運命」について

待っているのは客死なのだろうか。先ほど、これから一生涯にわたって異国の地で生活をしていくことについて考えていたときに、自分に待っているのは客死なのだろうかと思った。

旅先、あるいは異国の地で死ぬこと。それが客死だ。もしかすると、「異国」というのもまた自分なりの定義や意味付けが異なるかもしれない。確かに今は、日本を母国ないしは祖国と捉えているが、今の自分のオランダに対する思いなどを考えると、この国が今後自分にとっての新たな母なる国に

なる可能性が最近見え始めている。そうなってくると、オランダで生涯を閉じることは、客死に当たらないかもしれないと考えた。その一方で、今後も自分を呼ぶ場所に旅をすることは細々と続けていくであろうから、旅先で生涯を閉じる可能性についてはまだ多分に残されており、そうであれば客死の原義に該当するかもしれない。

「客死」の「客」とはひょっとすると、その場所に招き呼ばれた人間を意味するのだろうか。その意味において、オランダに呼ばれ、今の街で生活をしている自分は招かれた客なのかもしれない。そう考えると、全ての人が今生きている場所に招かれた客として存在していると言えるのではないだろうか。私たち人間は全て平等に、その土地に招き呼ばれた客だったのだ。客死をする人間は私だけではなく、全ての人間もそうだったのだ。そうした共通事項を見出す時、他者に対してより深い絆のようなものを感じる。

人は招き呼ばれる形でこの世に生を受け、そしてある特定の場所に招き呼ばれる形でそこで生涯を閉じる。全員がそれを宿命ないしは運命として抱えながら生きているのだ。

これまでの運命とこれからの運命。今改めて「宿命」という言葉と「運命」という言葉を調べてみて驚いたが、それらは言葉に内包されているニュアンスがやはり違うではないか。それらの言葉を発した時に感じていた微妙な差異はそのせいだったのだ。

宿命、それは前世から決まっており、私たちの力ではどうしようもないこと。運命、それは未来に開かれており、超自然的な力によって人にもたらされる巡り合わせのこと。先天的かつ後天的な何かを絶えず私たちは内側に抱えて生きているということ。それについて今静かに考え事をしている。宿命と運命には確かにそうした差異があるかもしれないが、宿命が運命に向かっていき、運命が宿命に回帰していくということもあり得るのではないだろうか。今、日々の生活の水面下で刻一刻と進行しているのはそのような気がする。

宿命が運命の方向に開かれ、宿命は運命を押し広げていく。もしかしたら、宿命が運命に転じることすらあるかもしれない。運命の側に立てば、逆のことが言えそうだ。言葉に窮するが、ここ最近私が感じているのは、宿命と運命の交感かつ交歓であり、お互いがお互いに影響を与え合いながら、自分の人生と自分自身をどこかに導いてくれているということである。まさにそこには、何か命とも呼

べるようなものが宿っていて、その命がどこかに運ばれている感覚なのだ。それが宿命と運命の交感・交歓を通じた共創的人生の進行である。

朝日を待つうっすらとした青空。新緑の木々の葉を揺らすそよ風。清澄な鳴き声を奏でる小鳥たち。そして自分。それらは全て宿命・運命として、交感と交歓の中で共創的な踊りを踊っている。フ
ローニンゲン:2020/5/23(土)07:14

5850. おぞましさを伴う夢

時刻は午前7時を迎えた。穏やかさ。それに満ち溢れた街にいる自分。そんな自分は、先ほど客死や宿命、そして運命について考えていた。前者の客死について言えば、ひょっとすると今朝方見ていた夢が何か引き金になっていたのかもしれない。今朝方の夢は、幾分恐怖を伴うものであった。

夢の中で私は、実際に通っていた中学校にいた。より具体的には、私は中学校2年性の時に使っていた教室にいた。そこではいつもと変わらずに授業が行われていたが、どうもみんながいつも以上に静かなことが気になっていた。そうした雰囲気の中、授業は進行していき、あるところで、隣の教室から悲鳴が聞こえてきた。クラスの全員が何事かと立ち上がり、隣の教室の様子を見に行こうとしたところ、私たちの教室で1人の友人が地面に倒れた。見ると、首あたりをナイフで斬り付けられており、即死のようだった。

隣の教室の状況を確認したところ、そこでもまた1人地面に倒れている人がいて、それは友人の兄だった。彼もまた刺殺されていた。隣の教室で悲鳴が聞こえた際に、不審者らしき男性がこちらの教室に紛れ込んでいるのを私は捉えていた。しかし、彼はうまく教室の中に溶け込み、何気ない形で友人を刺殺した。その不審者とは目を合わせることはなかったが、背中から発せられるオーラとその動きから、精神異常者だと思った。

廊下に飛び出した生徒たちは恐怖でうろたえており、その場は騒然としていた。先生たちもその場にいたのだが、その場はなかなか静かにならなかった。すると突然、そこから時間が一気に推し進められ、私はほとんど生徒のいない隣の教室の中にいた。刺殺された友人の兄の遺体はそこにはなく、垂れ流れた血もそこにはなかった。季節は秋から冬にかけてなのか、朝の優しい太陽の光が教室の窓から差し込んでいた。その教室には机も椅子も一切なく、ただそこにあったのは、凶鑑の

ような分厚い書籍でできた山のような塊だった。その塊を作っている書籍を眺めると、それらは大抵美術書だった。どうやらそれらは、先生が定期購読しているものようだった。私は何気なく一冊の分厚い画集を手に取り、パラパラと中身を眺めた。その後本の山の上から、また別の画集を手にとって中身を眺めてみたところ、そこには懐かしい漫画が描かれていた。

帰宅の時間が迫ってきていたので、私は教室を後にし、靴箱に向かった。靴箱で靴を履いて、体育館の前を通ろうとしたところ、体育館がまるでノートルダム大聖堂のような建物に改築されている最中だった。

先ほどの殺人事件の一件により、作業員たちも工事の手を止めていたようであり、帰宅のためにその建物の前を通ろうとした時にはまだ作業中だった。どういうわけか私は、そこから空を飛び、大聖堂の上の部分を見てから帰ろうと思った。そのまま空を飛んだ形で校門を出ると、高校時代にお世話になっていた女性の漢文の先生に呼び止められた。先生は、私が空を飛んでいることに驚いていたようだった。どうやって空を飛んでいるのかを先生は知りたかったらしく、その方法を私に尋ねようとしていたようなのだが、私はてっきりそんな力を発揮していることを怒られるのかと思っていた。

先生と話をするために少し高度を下げた時、先生が「とても不思議な力ね」と述べたのだが、最初私はそれを「とても不審な力ね」と述べたのかと勘違いしてしまっていた。空を飛ぶことは簡単だと先生に伝え、身振り手振りを交えてその方法を簡単に伝えた。先生は笑みを浮かべ、そこで私たちは別れた。

社宅に近づいてきた時、私は身震いがした。というのも、先ほどの精神異常を抱えた不審者が辺りをうろついていたからである。犯人の手元には殺害に使ったと思われるナイフがあり、さらには彼の服には数字が入った札が付けられていた。その札の数字を見ると、「368」と書かれており、それは自分の自宅だと気付いた。

犯人はどうやら我が家に忍び込もうとしているらしいということに気づき、私はなんとかそれを食い止めようと考えた。上空から策を練っていたところ、犯人と距離を置く形で、犯人の背後には親友(SI)がいて、車の影に隠れながら、犯人を捕まえる機会を窺っていた。親友の彼と私とで協力すれば、

なんとか犯人を捕まえられるかもしれないと思ったので、私は空を飛びながら犯人の確保に向けて動き出した。犯人が社宅の階段を上がり始めた時、私はわざと大きな声で自宅にいる母を呼び、鍵とチェーンでドアをしっかりと閉めるようにと伝えた。

自宅には父もいたらしく、父も母も状況をすぐに理解して、防犯に備えてドアをしっかりと閉めた。私の大きな声に犯人は動揺したようであり、途中まで上っていた階段を急遽下りるために反転したところで、親友に捕まった。そして私は、空から踊り場に到着し、犯人の頭を石でできた鉄球のような塊で何度か殴打した。すると、犯人は何かをぶつぶつと喋っていたが、はっきりと聞き取ることはできなかった。

犯人の身柄を確保した友人は、犯人を警察署に連れて行った。そこでようやく私は安堵感に包まれ、自宅のドアを開けた。大変なことが今日起こったことを両親に伝えた後、自室に戻ると、自分の部屋から物がごっそり消えていて、部屋がとてもすっきりしていた。どうやら、父が整理整頓をしてくれたらしかったが、まだそれが完了していないとのことであり、そこからの整理整頓は自分で行うようにと父に言われた。しかし部屋はもう整理整頓する余地などなく、どこをどう整理整頓すればいいか迷ってしまった。おそらくはまだ押し入れが整理整頓されていないのかと思い、後ほどそこを確認しようと思ったところで夢から覚めた。

整理整頓された後の部屋において、室内のバスケットゴールの位置が以前とは変わっていたり、布団を敷くスペースが変わっていたりと、以前の自分が慣れ親しんでいた部屋とは少し違う部屋がそこにあったことに中立的な違和感を感じていた自分がそこにいたのを覚えている。フローニンゲン：2020/5/23(土)07:47

5851. 本日を振り返って

穏やかな世界の中で、時が時の望むままに進んでいくような1日であった。そして、そうした時の流れとピタリと寄り添うように自分の1日が過ぎていった。午後7時半に近づきつつあるフローニンゲンは、少しばかり風が強い。そんな中でも夕日が見えることは幸いである。

今日は主に午前中に創作活動に励み、午後からは「一瞬一生の会」のための補助音声教材を作っていた。参加者の皆さんのリフレクションジャーナルが大変素晴らしく、1人1人のジャーナルエン

トリーに対してコメントをしていると、随分と長い音声ファイルになってしまった。中には76分ほどのものもあった。今日はこれからもう少し音声ファイルを作成したいと思う。

夕方に街の中心部に買い物に出かけた時、やはりまだ肌寒さを感じた。運動のできる格好をして、15分ぐらいの時間を軽くジョギングしてスーパーに向かった。街には徐々に活気が戻ってきており、土曜日の今日は平日よりも人が多かったように思う。以前と同様に街が動き出すのかはまだわからず、もしかしたらもう2度と以前のように街が動かないのかもしれないが、事態は着実に好転に向かっている。

オーガニックスーパーに到着し、今日こそはと思ってキノコが売られているコーナーに行ったところ、またしても椎茸だけが売り切れていた。しょうがなく言うてはマッシュルームに可哀想だが、代わりにまたしてもマッシュルームを購入することにした。椎茸だけが売り切れていることには何か理由があるのだろうか。コロナウイルスに椎茸の成分が効くとか、あるいは物流上の問題か何かののだろうか。そのあたりの真相は定かではない。

それではこれから音声教材の作成に取り掛かり、メールへの返信を済ませてから、絵を少々描いて今日も早めに就寝したい。フローニンゲン:2020/5/23(土) 19:27

5852. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。この頃は、午前5時半を過ぎると辺りはすっかり明るくなっており、日が昇るのが本当に早くなった。今のこの時間にはもう太陽が昇っていて、赤レンガの家々の屋根は朝日に照らされ始めている。平穏さと落ち着きのある日曜日の朝。今それを感じており、この瞬間を堪能している。小鳥たちもどこか嬉しそうであり、それが彼らのさえずりに滲み出している。

今日もまた、静かな心を持って創作活動に打ち込んでいこう。昼前に1件ほどオンラインミーティングがあるが、それ以外の時間は全て創作活動に充てていきたい。

今朝方は少しばかり印象に残る夢を見ていた。大きく分けると2つほど夢を見ていた。そのうちの前半部分の方を覚えている。夢の中で私は、日本の都心部を走る列車に乗っていた。車内の雰囲気から察するに、それは東京で間違いないと思う。

列車の中には日本人が多くいて、彼らの中に自分の知り合いはいなかった。西に向かう列車の左側の列の席に腰掛けていた私は、反対側の窓を通して見える外の景色をぼんやりと眺めていた。すると、右隣に座っていた30代前半ぐらいの見知らぬ若い男性が突然私に話しかけてきた。

見知らぬ若い男性:「大変でしょうねえ。低学歴で安月給の人は」

そのようなことをその男性は私に述べてきた。列車の椅子に腰掛ける私の膝の上にはまな板があり、そのまな板は薄汚れていた。私はとっさに汚れた面を膝側に隠し、比較的綺麗な面を上にした。その男性は、私のまな板の汚れを見て、私には学歴がなく、それでいて給料の安い仕事についていると思ったようだった。その男性の口調から、完全に自分のことを蔑んで見ていることがわかった。自分のことを愚弄するようなことを言われたので、もちろんいい気はしなかったが、かと言って腹立たしさの感情が浮かぶわけでもなかった。

その男性はそこからもしつこく私を愚弄するように話しかけてきて、給料の額について質問してきた。私は正直に、もうカネを得るために働く必要がないほどの資産を形成していることを伝えると、その男性は目を丸くして驚いていた。するとそこからは男性の態度が一変し、丁寧な言葉で私に話しかけるようになった。そこで夢の場面が変わった。

その次に見ていた夢をあまり思い出せないのが残念だ。次の夢の中では友人たちが現れていたように思う。決して否定的な感情を引き起こす夢ではなく、中立的な感情の中で進行していくような夢だったような気がしている。またふとした時にその夢について思い出すかもしれない。これから創作活動に取り掛かるが、その最中で夢について思い出すことがあれば、また書き留めておこうと思う。
フローニンゲン:2020/5/24(日)06:35

5853. 今朝方の驚き:椎茸の原木栽培を始めた父

時刻は午後7時を迎えた。今日は午前中の途中から雨が降り始めたが、夕方には雨が止み、今は夕日が輝いている。明日からはまた晴れの日が続くようなので、この時期の清々しいオランダの気候を満喫したいと思う。今朝方、1つ驚いたことがあった。何気なく父のブログを見たところ、そのタイトルに驚かされたのである。

タイトルは、「バルコニーで椎茸を原木栽培:至極の味と風味!!!」というものだった。それを見て、「やられた!」と思った。

ちょうど昨日、街の中心部のオーガニックスーパーに足を運んだ時に、きのこコーナーに椎茸が置かれておらず、少し残念な気持ちになった。その翌日に、まさか椎茸に関する父のブログ記事を見るとは思ってもいなかったのである。父のブログ記事を読むと、このようなことが書かれていた。

「昨年、おがくずの椎茸栽培キットを購入して室内で大小様々な50個を超える椎茸を栽培しました。でも、香りと味は期待値未満でした。そこで、原木栽培をすることにしました」

ちょうど昨年一時帰国していた際にはまだ椎茸を栽培しておらず、その後に栽培を始めたのだろうか。そう言えばと思い出してみると、椎茸を栽培するというようなことを述べていたようないなかったような、そんな記憶が蘇ってくる。いずれにせよ、父は昨年から椎茸をバルコニーで栽培していたらしく、椎茸の栽培キットではあまり美味しい椎茸ができず、原木栽培に切り替えたようだ。写真付きのブログを見ると、本当に本格的に椎茸を栽培しているようであって、思わず笑ってしまった。愛犬もバルコニーの原木が木になるようであり、クンクンと木の香りを嗅いで興味を示している写真が掲載されていた。それを見て、また思わず微笑んだ。

私が椎茸を意識して摂取し始めたのは比較的最近のことだったので、それよりも前から椎茸に着目し、そしてそれを自家栽培するというのはさすが父である。その続きの説明を読むと、「原木の場合、2~3年程度は新鮮な椎茸を栽培できるそうですが、椎茸菌以外の雑菌を抑えて椎茸の収穫量を増やすためには、椎茸種を更に植え付けた方が良いでしょう。そこで、椎茸の種100個を購入し、電動ドリルとハンマーを使って植え付けることにしました」とあり、その後にドリルで木に穴を開け、そこに種を植え付けている写真が掲載されていた。そして最後の文章として、「なお、直径9.2mmのドリルが最適です」という言葉で締め括られていた。

椎茸を栽培するという行為そのものや、椎茸栽培についてあれこれ調べて試行錯誤するあたりが自分ととても似ていると思った。自分と似ているというよりむしろ、私が父に似たと言った方が正確だろう。栽培された椎茸の写真を見ると、実に立派であり、味も良いようなので、この秋に実家に滞在

する際に、父の作った椎茸を食べることが非常に楽しみである。フローニンゲン:2020/5/24(日)
19:26

5854. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。平穏さに満ち溢れた週末が終わり、本日から新たな週を踏まえた。月曜日を迎えた今日も、土日と変わらずとても平穏である。近くではスズメたちが可愛らしい鳴き声を上げており、遠くではハトが鳴いている。今、黄金色の朝日が赤レンガの家々の屋根を照らし始めた。爽やかなそよ風が新緑の葉を揺れ動かしており、そよ風が新緑の木々に挨拶をしているかのようだ。そしてそよ風に揺れる新緑の木々は、私に対して挨拶をしてくれているかのようである。

今朝方もまた少々夢を見ていた。夢の振り返りをした後に、いつものように創作活動を開始しいていこう。今日は昼の2時からオンラインミーティングがあり、それ以外の時間は全て創作活動に捧げよう。

夢の中で私は、スイスのドルナッハにいた。その街にはシュタイナーの思想を探究できる精神自由科学大学という教育機関があり、私はそこにいた。大学の周りは緑豊かであり、自然の力を大いに感じることができる。その日もワークショップ形式のクラスがあり、それに参加しようと思って大学に到着すると、大学の入り口近くで見慣れた顔を見た。そこには、小中高時代の女性友達(KF)がいたのである。彼女がそこにいることに最初私は驚いたが、話を聞いてみると、彼女もシュタイナーの思想を含め、霊性学に関心があるようだった。彼女もこれから一緒に同じクラスに参加するようだったが、話を聞くと、この大学で教えられている霊性学の考え方の一部に疑問を持っているとのことだった。実は私も彼女の指摘する点について疑問に思っていたこともあり、さらに彼女の話の同うことにした。

その後、大学のキャンパス内を散歩し、クラスに到着し、女性の教授に挨拶をしたところで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、敬愛するある画家の方が登場していた。その方はテレビの取材をいくつか受けており、ある取材が終わったところで少し話す機会を得た。その方は神社にいて、神社の中でまずは少し話をした。

その日はお互いにあまり時間がなかったので、後日また2人で話をさせていただき約束をした。すると、その方は多忙であるにもかかわらず、とても親切に、私がいる場所まで来てくれると笑顔で述べた。だが私はさすがにそれは恐縮だと思い、こちらから出向くという旨を伝えた。今度2人でゆっくりと話ができることを楽しみに、その方とその場で別れた。今朝方はそのような夢を見ていた。どちらの夢も覚えているシーンとしては少ないが、感覚として残っているものが多くある。とりわけ後者の夢に関しては、嬉しさの感情と幸せの感情が混じり合ったなんとも言えない感覚があったのを覚えている。フローニンゲン:2020/5/25(月)06:20

5855. 発達現象に関する科学的な議論と規範的な議論の峻別と統合及び標準化 アセスメントの危険性

爽やかなそよ風が吹いている。空にはうっすらとした雲がかかっているが、幾分晴れ間も見える。午後になればもっと天気が良いだろう。先ほど、少しばかり雑多なことを考えていた。1つには、人間発達というものを私たちがいかに取り扱っていくのかに関することである。

数年前までの私は、発達科学の研究に集中しており、発達科学者であるがゆえに、科学的な発見事項と規範的な事項を区別する形で取り扱っていた。つまりは、発達とはいかなるものであるかを科学的に明らかにするスタンスと、発達とはどうあるべきであるかという規範的なスタンスを分けるべきだと考えていたのである。しかしながら、最近になってそうしたあり方は単なる分離的な発想に基づくものであり、必要なことは双方の峻別からの統合的な議論なのではないかと思ったのである。

巷では、発達現象に対して盲目的ないしは無意識的に価値的な意味合いを付与する傾向が蔓延している。例えば、成達は高ければ高いほど良いというような考え方である。まさにここでは、科学的な事柄と規範的な事柄が混ぜこぜになっており、両者が未分化の状態なのだ。それがゆえに成達を歪めてしまうような実践が行われたり、浅薄な議論がなされたりする。

私たちが発達現象に価値的な意味合いを付与してしまうのはある意味不可避であり、それは規範的な精神を持つ人間存在にとっては内在的な性向であるために——人間は事実に対して価値を付与し、その価値を起点にした物語を紡ぎ出してしまう不可避の性向があり(言い換えると、人間は意味のみだけでなく、価値を付与することを宿命づけられた生き物だと言えるかもしれない)、社会

もまたそうした性向を持って回っているのだ——、発達現象に価値的な意味合いを付与することを制御するのではなく、その意味付けの方法そのもの及びその物語をより緻密なものにしていく必要があるのではないだろうか。つまり、発達現象に価値を付与することが悪いことなのではなく、いかなる価値をいかなる意味合いで付与するのが重要であり、そしてそれが個人や社会にもたらす帰結まで念頭に入れた上で、発達現象に付与する意味付けの幅と深さをより豊かなものにしていく必要があるのではないかということである。

端的には、発達現象に関する科学的な意味と規範的な意味を峻別しながらも、それでいて双方を統合的に語っていく必要があるということである。どちらか一方だけを語るというのでは不十分なだ——峻別するだけで不十分なのは、例えば発達現象に関する様々な科学的真実が明らかになった時に、それでは私たちは一体どうしたらいいのだろうかという問いに対して、議論と実践を裏切るものにしていけないからである——。まさに統合的な視野と発想を持って、科学的事実(発達とは何であるか)と規範的価値(発達とはどうあるべきか)の区別と統合を図っていくことが私たちに求められることだろう。決してどちらか一方を優先させるのでもなく、両者を分離させるだけで終わらせるのではなく、双方にまつわる意味付けと物語を豊かなものにしていく必要がある。

もう1つ考えていた雑多なこととしては、カート・フィッシャー教授が果たした功績に思いを巡らせていたときに、「心(知性)は機械である」というメタファーではなく、「心(知性)は生態系である」というメタファーとして認識することの大切さと標準化されたアセスメントについて考えていた。

発達理論に基づくアセスメントを導入する前には、上述の通り、発達に関する科学的な議論と規範的な議論を十分に行い、さらにはアセスメントが持つ教育的かつ処方的な効果まで十分に議論しなければならない。それが最低限要求される事柄だと思っただが、そうした議論がなされたとしても、私たちはまだ注意しなければならないことがある。それは、発達測定というものが標準化の産物であるということだ。それは、多様な発達プロセスの中に共通の発達パターンを見出すことによって一つの物差しとして生み出される。ここに思わぬ落とし穴がある。

まさにそれは、多様性の中に潜む普遍性を見い出しているという優れた側面があるが、それを大規模な形で多様な人間に適用することは大きな問題を内包している。それがまさに、私たちの心や知性を標準化してしまう危険性があるという問題である。例えば、ある1つの極めて優れたアセスメント

が世に送り出された時、私たちの社会はいかように振る舞うことが予想されるだろうか。おそらく、企業や学校、そして親などは、こぞってそのアセスメントで測定される知性領域(能力領域)の開発に躍起になることが容易に想像される。それが押し進められると人間はどのようになるだろうか。

おそらくは、私たちが本来持つ知性や能力の多様性は損なわれ、そのアセスメントを通して光が当てられた知性や能力だけが発達するという実に奇妙な人間、すなわち知性的・能力的に偏りのある奇形種の人間が生まれてしまう危険性がある。

今回のコロナの1件でも、一極集中型の都市の脆弱性は明るみに出されているが、私たち個人の知性や能力においても同じである。標準化されたアセスメントの導入は、本来多様性の確保された生態系としての知性を単一なものにしてしまう危険性があり、それは個人を超えて、集合的な意味合いにおいても知性を単一なものにしてしまう危険性がある。

個人及び集合的規模での知性の生態系が崩壊してしまうことを防ぐためには、仮に極めて優れた標準化アセスメントが開発されたとしても、そのアセスメントが内包している危険性を深く理解し、その運用に関する議論を絶えず緻密なものにしていくように尽力する必要があるだろう。そして何よりも、人間発達に関する社会の物語を大きく変容させ、より豊かなものにしていく必要がある。今の物語はあまりに貧弱なものなのだから。フローニンゲン:2020/5/25(月)11:23

5856. 「能力のフラットランド化」が進行する現代社会で求められる能力とは

時刻は午後7時を迎えた。今、燦然と輝く夕日がフローニンゲンの街を照らしている。小鳥たちは今もまだ鳴き声を上げており、1日の終わりを祝福しているかのようだ。

今日は早朝に、人間発達に関していくつか考え事を書き留めていたように思う。その後もそれらの論点に付随することを色々と考えていた。備忘録がてら、それらについて書き留めておこうと思う。

今回のコロナの一件で明らかになったように、私たちは置かれている生存状況が変化に晒されると、それに応じて人間要件も変わる。そしてそれは不可避的であり、突発的でもある。このような状況に突如として晒されうるのが人間社会の不可避的な特性であれば、私たちはこのような時代においてどのような能力を少なくとも持つておくべきなのだろうか。

巷では、個別具体的なある特定の能力を伸ばすことがあたかもこの現代社会で生きていく上で必須のように喧伝しているが、それらの能力を冷静になって眺めてみると、果たして今回のような生存状況に関わるような社会情勢下で必須の能力なのかと疑ってしまいたくなる。また派手な形で、あたかも普遍的に通用するかのように宣伝されるスキル——例えば「21世紀に求められるスキル」と宣伝される類のもの——というのも、全く未知の生存状況や社会状況に突発的に巻き込まれるこの現代社会で必須のスキルなのかは疑わしい。

端的に言えば、私たちが発揮する能力や涵養すべき能力というのも、社会的なコンテキストの変化に応じて変わるものである。様々な業界や領域で声高に叫ばれている必須のスキルと呼ばれるものも、それは決して不変的なものではないはずであるし、本質的には社会のコンテキストの変化によって変動するものなのだという当たり前のことを私たちはもう一度確認しておく必要があるだろう。おそらくそうした態度が欠落しているがゆえに、何か万能薬的な1つの能力だけを躍起に伸ばそうとしてしまうのではないかと思う。

今朝方に書き留めていたように、確かに能力開発においては、1つの能力に時間やエネルギーを割くことはその能力を伸ばす上では重要なことなのだが、最初から設定の誤った能力に時間やエネルギーを割いてしまうというのは不幸である。残念ながら、実際にこの世の中で起こっているのはそうしたことのように思える。つまり、多くの人たちはそもそも、この現代社会で生きていく上で真に大切な能力とはかけ離れた能力を伸ばしているのではないかということである。明日に何が起こるか分からない社会の中で、そして絶えず変化するこの社会の中で必要だと言えそうな能力にはどのようなものがあるかを考えていた。

確かに、それを個別具体的に挙げればキリがないかもしれない。もし仮に、社会的なコンテキストの変化が激しいこの現代社会において重要な能力を挙げるとするならば、絶えず変化する社会コンテキストの種類と性質を察知し、考察し、そのコンテキスト下で浮上する問題を解決に導く能力がどのようなものなのかを見極め、そしてそれを自ら伸ばしていける能力なのではないかと思う。さらには、社会的に構築された物語の歪みに気づき、それを是正していく試みに乗り出していける力も必須のものなのではないかと思う。端的に言えば、巷で叫ばれている開発すべき能力というのは、そもそもそうした能力が必要だと叫ばれる前提条件や社会コンテキスト——ある特定の能力が能力だ

と定義される際には、そしてそれが議論の焦点になる際には、特定のコンテキストが必ず存在している——には一切焦点が当てられない形で開発が進められる。

それらの個別具体的な能力は、確かに個別具体的な問題や課題に取り組む際には不可欠なものなのだが、そもそもそうした能力が必要となる前提条件や社会コンテキストに対する洞察が欠けている場合には、ひとたびその前提条件や社会コンテキストが変化した場合には、全く使い物にならない能力になってしまう危険性を持っている。

そうしたことを考えながら、また別の表現で言えば、上記の能力は、人間要件にせよ、能力要件にせよ、社会コンテキストにせよ、それらを取り巻く既存の物語を読み解く力だと言えるかもしれない。そしてそうした物語を読解する力を超えて、今回のような生存状況が脅かされる現代社会においては、そして今後の社会においては、既存の物語の特性や構造を把握するだけではなく、その物語の根本的な歪みを発見し、それを是正していく力、端的には物語を再構築していくことのできる力が求められていると言えるかもしれない。

個別具体的な形のあるような脳力や知性を求める風潮というは、「能力・知性のフラットランド化」あるいは「人間要件のフラットランド化」とでも呼べるのではないだろうか。こうしたフラットランド化現象に抗う意味でも、そしてそれを改善していく上でも、あえて上述のような形のない能力の涵養に向けた取り組みをしていく必要があるように思える。

繰り返しになるが、このような現代社会において、その能力が求められる前提条件や社会コンテキストに関する議論なしに、具体的にある個別具体的な能力だけを伸ばそうとするのはとても危険である。一流の研究者が行った発達研究の成果や精密に設計されたアセスメントがある特定の能力の重要性を説いていたとしても、その能力だけを社会全体が躍起に伸ばそうとするのは、知性という生態系の観点からも危険であり、そもそもそうした発達研究やアセスメントがある特定の前提条件に立脚した上で生み出されたものなのだから、そうした研究成果やアセスメントが指示する能力だけを伸ばすことが随分と馬鹿げた試みであることもわかる。優れたアセスメントや教育手法があったとしても、それを大規模な形で導入していくことは、人間存在を画一化させ、矮小化させる。もう現代人は随分と画一化され、矮小化された存在に成り下がっていることに気づく必要があるのではないだろうか。フローニンゲン:2020/5/25(月)19:42

時刻は午前5時半を迎えた。早朝のこの時間帯は、空にうっすらとした雲がかかっている。辺りはすっかり明るくなっているが、今日は輝く朝日を拝むことは難しそうだ。昼あたりから太陽の姿を見ることができそうということが天気予報を通じてわかる。それを楽しみにしてこれから過ごしていこう。

今朝方もまた夢を見ていた。いつものように夢について振り返り、その後少々絵を描いてから早朝の作曲実践に取り掛かりたい。今日は昼前にオンラインミーティングが1件あり、それ以外の時間はいつものように全て創作活動に充てたいと思う。

夢の中で私は、以前勤務していた進学塾にいた。その塾は帰国子女向けのものであり、様々な場所にある校舎の中でも、私はロサンゼルス校にいた。私は一度その塾を辞め、再びそこに戻ってきたようだった。ちょうどその日は、新しい学期が始まる時であり、校舎の中には新鮮さが漂っていた。生徒たちがやってくる前に、校舎にいる先生たちは色々と事務的な準備をしたり、授業に向けた準備をしていた。

その校舎の校長先生は私が戻ってきたことを喜んでいて、これから授業があるにもかかわらず、私にウィスキーを差し出してくれた。ウィスキーの瓶をもらったわけではなく、私の机には小さなプラスチック瓶のような容器があり、校長先生はそこにウィスキーを少々注いでくれた。私はそれを一口飲み、持ってきたカレーをレンジで温め、それを食べながら自分の授業の準備に取り掛かった。

私がその日に担当する最初の授業は、小学校4年生の国語であり、そのテキストを探したが、なかなかそれが見つからなかった。テキストを探していると、2人の女性が校舎の扉を開けて中に入ってきた。どうやら2人はこれから採用面接を受けるようだった。一方の女性は私よりも少し若く、もう一方の女性は私よりも少し年齢が上のようなようだった。

何か個室に入って面接をするのではなく、共有スペースのような場所で面接が始まり、私を含め、他の先生たちも面接に加わった。2人が担当する強化はユニークであり、片方の先生は音楽とダンスを、もう片方の先生はプログラミングか何かを担当することになっていた。先生たちの担当科目の一覧表が手元にあったので再度それを眺めると、校長先生は今年からファイナンスも受け持つこと

になっており、それには驚かされた。そんなものまでここで教えているとは思ってもいなかったのである。

2人の面接が終わると、ちょうどそのタイミングで2人の生徒(兄と妹)と彼らの母親が入ってきた。どうやら休暇中に、家族で南国に出かけていたそうなのだが、母親が「60日間の休みは大変充実していました」と言うところを言い間違えて、「60年間の休みは大変充実していました」と述べたので、その場にいた全員が笑った。さすがに60年間の休みは長すぎるだろうと思ったのである。言い間違えた母親本人も可笑しくなったようであり、大いに笑っていた。そこから母親も含めて、2人の生徒に休みの体験について話をしてもらった。

その後、受け持つ授業の時間が迫ってきていたので、準備の詰めに入った。すると、もう生徒たちがどんどん校舎にやってきて、授業の開始を迎えた。教室に入ると、私は別の先生が担当する教室に入ってしまう、その場ですぐに謝って、自分の担当する授業の教室を探した。授業のない先生が親切にも私の教室の場所を教えてくれ、ようやく教室に入ることができた。教室に入ってみると、思っていた以上に生徒がいて、そして彼らはとても元気そうだった。授業の開始と共に、最初はみんなに自己紹介をしてもらおうと思った。

彼らは全員現地校に通っており、こうして日本人だけで授業に参加できることを嬉しく思っているのか、幾分興奮気味のような感じがあった。教室の一番後ろの席に座っている男の子が突然キーボードで歌を歌い始めた。そこから随分と教室が賑やかになり、いったん静かになってもらうようにこちらから声をかけ、ようやく自己紹介を始めることができた。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン：

2020/5/26(火)06:08

5858. 脳・心・魂の次元におけるジャンクフード：絶えず政治的なアセスメント

時刻は午後7時を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終え、今再び書斎に戻ってきた。穏やかな夕日がフローニンゲンの街に降り注ぎ、小鳥たちの鳴き声が爽やかなそよ風に乗ってここに届けられている。今日もまた自らのライフワークに取り組む1日であった。今朝の起床は午後5時とゆったりしていたが、それくらいの時間に起きたとしても、今日は十分に自分の取り組みに従事する時間があった。時間のみならず、自分の取り組みに集中できていたことの方が大切かもしれない。

脳、心、魂の次元におけるジャンクフードを避けるようにした穏やかな生活が実現されている。目には見えない次元のジャンクフードで溢れたこの現代社会において、そうした生活を実現させていくことは難しいが、現代社会が私たちにフィードしてくるそれらのジャンクフードは、自分の取り組みに集中して取り組むことを阻害することを考えた時、そうしたジャンクフードの存在に自覚的になり、意識的にそれらから離れるように心がける必要があるだろう。SNS、ニュース、広告など、意識を散漫にする物から意識的に距離を置くことが大切だ。さもないと、絶えず意識が外に向かい、辺りをキョロキョロと見回すことだけをして生きている生き物ようになってしまう。

昨日も雑多なことを考えていたが、その中でも発達測定に関することについて言及していたように思う。IQテストを始めとする標準化アセスメントは、そもそも軍事目的で開発され、その背後には優生学的(eugenic)・能力主義的(meritocratic)・エリート主義的(elitist)な発想に基づく政治的な側面があったことを忘れることはできない。

現在のアセスメントについても多分に政治的な要素が混入しているのである。端的には、それは一部の人間たちが社会を管理・改変していくために作ったソーシャルエンジニアリング的なツールであることを忘れてはならない。

標準化アセスメントは確かに、それがアセスメントであるがゆえに、必ず何かしらの客観的真実を開示する。しかしながら、それは絶えずリアリティのほんの一部しか映し出していないことを念頭に置いておく必要があるだろう。ケン・ウィルバーと並ぶ統合思想の提唱者であるロイ・バスカーの言葉を借りるのであれば、アセスメントというのは常に「部分的なリアリティ(demi-reality)」しか照らし出していないことを見落としてはならないのだ。

昨日、アテネのホテルに連絡をしたところ、本日返信があった。幸いにもホテルは来週からオープンするとのことであり、ギリシャ政府の対応として、7月からようやく空港が稼働し始めるとのことであった。ホテルの担当の方曰く、政府の対応は頻繁に変わるためにそれも確定事項ではないとのことだが、この調子であれば、7月末にはアテネに行けそうである。明日あたりにフライトの変更をし、ホテルに再度連絡をしてリスケをしてもらおうと思う。フローニンゲン:2020/5/26(火) 19:31

5859. 今朝方の夢

時刻は午前3時半を迎えようとしている。今朝の起床は午前2時半過ぎと、いつもより少し早かった。ここ最近では以前よりも夕食の量が減り、就寝前には消化活動が落ち着いている。また、寝る前にはパソコン画面を眺めたりすることをせず、絵を描いてくつろぎ、就寝直前にはヨガなどをするこゝによって、身体をほぐしていることが快眠につながっているように思う。

今日もまた静かで落ち着いた心で自分の取り組みを前に進めていこう。目には見えない形で自分の内面世界に侵入してくる放射能やウィルスのような情報には注意をし、それらからはできるだけ距離を取りながら日々を過ごしていく。自分の心身は自分で守りながら、同時にそれらを自ら育んでいく。

辺りはまだ真っ暗であり、小鳥たちもまだ鳴き声を上げていない。そんな中、今朝方の夢を少しばかり思い出している。夢の中で私は、実際に通っていた小学校から帰っている最中であり、通学路の途中にいた。学校を出発して少ししたところに歩道橋があり、それを渡るとおもちゃ屋があった。

ちょうど私は歩道橋を渡っている最中で、そこで何人かの友人たちの姿を見かけた。彼らの姿を見て、私は彼らに話しかけ、今日これからうちで遊ばないかと提案した。今はやっているゲームと一緒にやろうと持ちかけたところ、そこにいた数名の友人たちは笑顔でぜひ遊びたいと述べた。そこで私は、何時まで遊ぶかについて彼らに提案し、午後4時半まで遊ぶのはどうかと述べた。すると、ある友人(AF)がもう少し長く遊びたいと述べた。他の友人たちの意見も聞きながら、それでは午後5時まで遊ぶのはどうかということになり、そうすることにした。そこで夢の場面が変わった。

今朝方はその他にも夢を見ていたように思うが、それらに関する記憶はない。今朝は、幾分無意識が落ち着いていたように思う。それでは、これから少々絵を描き、早朝の作曲実践に早速取り掛かっていく。今日は午後1件ほどオンラインミーティングがあるが、それ以外は何もないので、いつものように創作活動に多くの時間を充てていく。できれば今日の午後にフライトの変更をしておきたい。航空会社に電話をし、7月末にアテネに向かうフライトを確保しよう。フローニンゲン:2020/5/27 (水)03:41

時刻は午後7時を向けた。つい今し方夕食を摂り終えた。振り返ってみると、今朝は午前2時半過ぎに起床していた。そこから今に至るまで、もちろん休憩を随所に挟んでいたが、活動の最中はそこに没頭している自分がいた。

意識をしないと自分の脳や心に入り込んでくるジャンクフードのような情報から距離を取り、そうしたものを取り入れていないかを絶えずモニタリングしていくような意識がここにある。こうした意識を持ってもうしばらく過ごしていけば、ジャンクフードのような情報から距離を取ることが自然な習慣となるだろう。

今日を含め、先々週と今週は、オンラインミーティングが多くあった。来週も何件かあり、今色々自分の人生が新たな方向に動き出していることを知る。もちろん、日々の生活の中心は創作活動と探究活動にあるが、それ以外にも社会と接点を持つ形の活動も程よくあることは、日々を豊かにする上で欠かせない。

先日ふと、自分にとって創作活動は、それそのものが内なる安全基地のようであると考えていた。活動の最中の心的空間は自分にとって深く寛げる場所であり、そこは心と魂の休息場とでも呼べるかのようなものだ。そしてそれは、休息を通じた治癒を心と魂にもたらすだけでなく、それらを育む涵養地としての役割も果たしてくれている。

どのような形であっても良いので、多くの人がそうした場所を自分の内側に持っていて欲しいと思う。理想は、幼少期の頃の教育課程の中でそれを持てることであるが、それは成人になってからでも持つことができる。それを忘れないでほしいという思いがあった。

今日もまた作曲実践に打ち込む中で色々気づきが得られた。知識的・技術的なことが多いが、それ以外にも思想的な側面での気づきを日々得られていることは喜ばしいことである。

自己の固有の創作創造空間を発見すること及びそれを作ること。自分は音と絵で詩を綴る人なのだという気づき。音と絵を通じた日記的・詩的創造物を絶えず生み出していく。長いものや大きいも

のはいない。その瞬間に佇み、そして移ろう自己の痕跡を音と絵を通じて残していく。それは自己の存在証明としての側面もあるかもしれないが、それを超えた形でなされる営みでもあるある。

ある1人の人間が固有の生き方を貫き、それを通じて生き方の多様性を確保し、人間が生きるという生態系の健全さを確保すること。己が己の生き方を貫くことが、人類全体の生き方そのものに深く関係しているということ。それを忘れないようにする。

明日もまた、音と絵を通じて詩を綴っていこう。それがどれほど些細なものであってもいい。それらの一つ一つは、自分がこの人生を通じて人間として固有に生きたことの貴重な足跡なのだから。フ
ローニンゲン:2020/5/27(水)19:29